

選評

大阪大学大学院国際公共政策研究科教授 星野 俊也

# 閉塞感を抱く日本人へ アフリカに目を向けよ



■ 峯陽一・武内進一・笹岡雄一編「アフリカから学ぶ」 ■ 有斐閣 ■ 2010年9月  
発行 ■ 四六判、464ページ  
■ 定価2,415円（税込）

いま、アフリカが熱い。人口は10億規模の大陸で、躍動感に満ちた経済は、成長率が平均で5%。携帯電話は10人に4人までが手にし、世界経済にとっては「最後のフロンティ

ア」としての期待も高い。豊富な天然資源に恵まれた大陸でもある。もちろん、それが内戦をエスカレートさせる原因になっている現実も見逃すことはできない。しかも、極度の

貧困に加え、エイズやマラリアといった感染症の広がりも深刻である。しかし、アフリカには輝きがある。とりわけ、多くの人々が色あせた沈鬱な閉塞感を抱き、社会は内向きに転じ、得意な技術や制度面でも「ガラパゴス化」が進む日本、年間3万人を越す自殺者が出るような日本からアフリカを見ると、表面的な豊かさ（その豊かささえも最近は当然視できないが）の中でわれわれは何かを確実に見失っていることが分かる。

学問において研究対象を「理解」することは、いわば研究そのものの目的と言える。だが、研究対象からさらに「学び」をも見出すという知的活動が本書を特徴づけている。その対象はアフリカ。日本を代表するアフリカ研究者である本書の執筆陣は、

アフリカをときに厳しく、そして常に温かく見つめる中からさまざまな学びを引き出している。それはまた、東アジアに暮らすわれわれとアフリカの人々という互いに異なる文化を持つ者たちの間の邂逅かいこうと交流と相互分析の大きな成果と言えるだろう。

本書は、われわれがアフリカのダイナミズムを多面的に理解するための入門書としても秀逸である。第I部では、アフリカの歴史が紹介される。欧州列強によるアフリカ分割の歴史は学校でも触れられるが、前植民地時代にさかのぼるアフリカ固有の王国や帝国の歴史（西アフリカのガーナやマリやソンガイ、中東部アフリカのコンゴやブガンダ、南部アフリカのモノモタバやズールーナ）にも目が開かされる。アフリカ

は「歴史のない大陸」どころか、そもそも人類がアフリカ起源である（従って、われわれは、もとは皆「アフリカ人」だった）ことを忘れてはならない。他方で独立を果たしたアフリカ諸国が宗主国による分断支配や間接統治を通じ、エスニック集団が固定化され、しかも植民地の境界線が独立後の国境になったことによる矛盾、さらには、被支配の経験を持ちながら自ら横暴で支配型の統治を強行した国家指導者の出現など、アフリカの「今」を理解する背景が的確に描かれている。

第II部では、「平和なアフリカ」の実現に向けて、ルワンダやシエラレオネやジンバブエでの経験を例に冷戦後に多発したアフリカの紛争の背景と、人道支援や平和構築支援に向

けたさまざまな試みや工夫が紹介されている。また、第III部では、「豊かなアフリカ」を推進するため、アフリカにおけるコミュニティー開発や資源運用、教育開発、感染症対策、マイクログレジット事業などの意義が具体的な事例と共に議論されている。こうした活動は、人々を恐怖と欠乏から保護・解放し、人々の能力強化を通じてたくましく生きる力を育む「人間の安全保障」アプローチの実践例としても読むことができる。

本書は、1990年代以降にアフリカでも進展した政治と経済の自由化の動きを「分権化」概念によって分析している。そうした新状況におけるアフリカの21世紀を展望した第IV部からは、アフリカの市民社会組織の発展や日本政府の取り組み、そ

れにアーティストや民間企業の活躍など、勇気づけられる多くの支援の広がりの様子が見て取れる。

アフリカからわれわれは何を学ぶべきなのか。その答えは一つではなく、読者自らの問題意識によって導き出されるべきものに違いない。しかし、今まで暗部ばかりが取り上げられがちだったアフリカとそこに暮らす人々のたくましさやひとたび知ったならば、同じ地球社会の隣人として、アフリカが自分たちのライフスタイルや発想や気概を見つめ直す上でも、大きな学びの場であることに気付かされるだろう。

## 文化遺産の保護に尽力する 一人の学者の活動と思索の書

悠久の大地は、時を超え、自然や



■前田耕作『アフガニスタン  
を想う—往還半世紀—』  
■明石書店 ■2010年10月  
発行 ■B6判、288ページ  
定価2,940円（税込）

景観の変遷や、そこに生を受け、あ  
るいは、その地で栄枯や盛衰をた  
どった人々の歴史を刻んでいる。「文  
明の十字路」といわれるアフガニス

タンの。とりわけ戦略的な要地として  
の宿命を負ったこの国の中央部、ヒ  
ンドウークシユ山脈の懐に抱かれた  
バミーヤン渓谷には、古来よりペル  
シャやヘレニズムの文化が伝わり、  
やがて仏教が興隆する。7世紀半ば、  
インド行の途上来訪した玄奘三蔵  
は梵衍那国の莊嚴な伽藍と2体の巨  
大な摩崖仏などにその目を奪われた  
という。

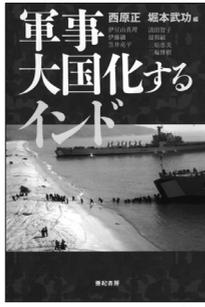
幾多の受難を乗り越えた人類の遺  
産は、しかし、われわれの同時代に  
なって決定的なダメージを受ける。  
旧ソ連の軍事侵攻に晒され、また、過  
激なタリバン政権の支配下では、優  
に1400年余りも風雪に耐えた大  
仏は爆破され、衝撃の瞬間はビデオ  
で世界に流されさえた。

本書には、アフガニスタンに惜し  
みない愛と情熱を注ぎ、紛争の隙を  
かいくぐっては過去と未来とをつな  
ぐ文化遺産の保存・修復に尽力する  
一人の学者の半世紀に及ぶ活動と思  
索と提言がつづられている。

無常は世の常である。しかし、現  
在まを生きるわれわれには、戦禍にあ  
えぐ人々の生命を救うとともに、人  
間の生と意志と想像／創造力の証で  
もある文化遺産の保護をも主流化し

ていく責任がある。歴史ロマンと背中合わせの厳しい現実を目の当たりにする中、いかに迂遠に見えようとも人間の文化的な所産の保護を含んだ包括的な復興支援なしには平和の礎は築けないとする著者の確信と実践から、われわれが学ぶべきことは多い。

## 新興国インドの外交・安全保障政策の行く末は



■西原正・堀本武功編『軍事大国化するインド』■亜紀書房 ■2010年9月発行 ■四六判、240ページ ■定価1,995円 (税込)

巨龍Ⅱ中国の台頭という見まごうことなき世界の現実はある意味、必然的に巨象Ⅱインドを動かしていく。

「インドの軍事大国化」を前面に押し出したタイトルはいかにもセンセーショナルだが、インドや南アジア情勢に関する該博な知識を有し、クオリティーの高い研究に携わる執筆陣の分析は冷静にさえ渡っている。

いわゆる「真珠の首飾り」作戦などにより、南インドの陸上部およびインド洋に急速に進出する中国の動

きは、地政学的な要衝であるこの地域からの米国プレゼンスの後退とも密接に連動する。では、インドはこの力の空白をうまく埋めることができるのか。本書では、インドをめぐる米中口日の4大国の変貌やインドと近隣諸国との関係（特に、アフガン・アスタンに本格的に関与する一方で、敵対するパキスタンとの対話・関係改善を目指すのか）、そして、テロや

越境犯罪など非伝統的な脅威へのインドの取り組みなどが体系的に論じられる。シーレーン防衛の必要や、ソマリア沖・アデン湾の海賊活動への対処を含め、インド洋における印中米の三つどもえのパワーゲームの行方やインドの核軍事力の現状と展望を含む、同国の軍事力の動向の分析も参考になる。

もとより、世界最大の民主主義国家とされる国において戦略ビジョンの策定や、あからさまな軍事大国化へのかじ取りは本国インドにとっても容易な作業ではないだろう。そうした中、本書は、インドの10年か20年後の外交・安全保障政策の方向性をも見極めようとする意欲的な共同研究の成果である。

(ほしのとしや)